Season

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｅａｓｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ４９２９Ｆ

【作者名】
田中　遼

【あらすじ】
雪の降る日、夢か現か戸惑う様な出逢いをした翔太と華。幼馴染の舞に思いを寄せる隼人、ずっとずっと一緒にいた隼人が見えていない舞。４人が歩いた季節のお話です。

出逢い

少年は一人、空を見上げていた。

最初は突っ立って上を向いていたのだが、楽な姿勢へ楽な姿勢へと体が動いて、今は仰向けに寝転んでいる。

空は全くの灰色で、太陽を浴びていない大地は痛いような冷気に包まれている。

そこに白の結晶というべききれいな粒が、ハラリ、ハラリと舞う。彼はそれをじっと見つめていた。

初めて見る大きさの雪とその静けさに、瞬きするのも忘れている。

そう、辺りは――――彼の住む大きな街と違って――――限りなく静寂に近かった。

時たま遠くから、鳥の羽音や鳴き声、木や屋根から雪の塊が落ちる音が聞こえてくるぐらいだ。

少年はゆっくりと冷気を吸い込んでから目をとじ、雪の積もる音を――――つまり無音を――――聞き取ろうとした。息を殺し、全神経を張り詰めて。

それでも何も聞こえなかった。

彼は満足げに息を吐き出し、目を開けた。

「うわぁ！！！」

少年は心底驚いた。何の音もしなかったにも関わらず、一人の女の子が上から覗き込んでいたのだ。

彼の声が辺りに響いた。しかし、少女は動じないで、彼の目を覗き込んでいる。

「……何してるの……？」

彼女が囁くように言った。

少年は鼓動がもとに戻るまで口を抑えて黙っていた。

少女はじっと待っていた。

「雪を……見てたんだ」

「目をつぶって？」

「……うん」

「おもしろい……？」

「ううん。ただ、すごくきれい」

「一緒に見ていい？」

「うん。……君、名前は？」

少女は彼の横に寝転がった。

「……白井　華……君は？」

「僕？麻地　翔太。えっと～・・・・・・・」

翔太は華をなんと呼ぼうか迷っていた。彼女がそれを察知したようだ。

「“華ちゃん”ってよく呼ばれるよ」

「じゃあ……華……ちゃん？」

華はクスクス笑った。

「わざわざ“ちゃん”付けにしなくていいよ」

「じゃ、華。いくつ？」

「5年生。翔太は？」

翔太はくすぐったそうにニッコリした。

「同じだよ。」

二人は恥ずかしそうに頬を染め、顔を見合わせた。そして空に向き直った。また、静寂が訪れた。

出逢い（後書き）

この話、ある賞に応募して、無残に散った作品の練り直しです。
友達に褒められたんで、調子に乗って載せることにしました。
自分では、なかなかいいものに仕上がったと見ています。どうか楽しんでくださいませ。

「ねぇ」

しばらくして華が問い掛けた。

「家はどこ？」

「……東京、だよ。明日には帰るんだ。華は？」

「今はここ」

「……今は？」

「お父さんの“サイシュッパツ”っていうのが多くて、よく引越すんだ……」

「ふーん……」

翔太はたまった息を一気に吐き出した。

息は冷気に触れて一瞬白くなり、手に落ちた雪のように溶けていった。

段々と日が落ちていっているのが分厚い雲を通して分かる。

雪はたった今止んだ。翔太は薄暗い雲を眺める気はなく、立ち上がった。

華はそれに倣って体を起こす。

ずっと空を見ていた二人は一面の銀世界に目を見張った。

翔太は華の手を引っ張って立たせる。別に立たせてどうかなる訳でもなかったが、ただ、じっとしていられなかったのだ。

それは華も同じだった。彼女は翔太の脇腹を突いた。

「かまくら作ろうよ」

翔太は首を横に振った。

「かまくらはスコップがいるでしょ？それよりさ……」

彼は手袋をはめなおした。

「雪ダルマ作ろう」

暗くなっていく雪国の平原で二人は雪玉を転がし始めた。

最初は交代交代で雪玉を押していたが、しばらくすると一人では動かせない大きさにまでなった。

そして二人で力いっぱい押してもうんともすんとも言わなくなり、翔太は汗だくの体を雪の上に投げ出した。

「ひゃあぁぁぁぁ……疲れたぁ」

華はまだ雪玉を押している。

「華ぁそん位で良いじゃん」

実際、雪玉は翔太の腰位の高さまで大きくなっている。

それでも華は押し続ける。う～んと唸りながら彼女は言った。

「大きい方が！……長く、残るから！……う゛う゛ぅ……」

しばらく翔太は華を呆れたように見ていたが、不意に立ち上がり、手伝い始めた。

二人で唸っていると、重い雪が少し前に進む。

翔太は力が抜け、雪の上にうつぶせに倒れた。横を見ると華も同じ様になっている。

彼女は翔太の方を向くと汗をかいた顔でニヤっとした。

「動くって分かったし、もうちょっと大きく出来るね」

「え！？」

華は声を上げて笑った。

「冗談冗談」

「……笑えない！」

「ゴメンゴメン。さ、頭」

翔太が再び立ち上がり、雪を手ですくい、雪合戦でつかう様な雪玉にした。

華がポカンと見ていると、彼はそれを胴体部分にそっと置いた。

「はい、完成！」

そう宣言した彼は伸びをしながらぶらぶらと歩きだした。

華は一瞬呆気に取られていたが、次の瞬間、バッと雪だるまの“頭”をつかみ、投げる。

バシャ！「痛！」

翔太は頭をはらいながら振り返り、続けざまに飛んできた雪玉を顔面で受けた。

華はガッツポーズをして笑う。

もちろん、翔太が即座に復讐し、白い弾が飛び交い始めた。

お願い

華が見事なコントロールで、陰から少し出た翔太の頭に雪玉を直撃させ、そこで合戦が終わった。

「大丈夫？」

華はクスクス笑いながら翔太に駆け寄った。

彼は暗い顔をしていたが、怒ってはいなかった。

「全っ然、大丈夫じゃない」

「……大丈夫だね。さ、お願いを聞いて貰おうかな」

「はい？」

華は翔太にウィンクを返した。

「一つ目は……」

「オイコラ」

翔太が遮った。

「なんだ、その“一つ目”ってのは。てか、そもそも、願い事聞くなんて言ってないよ」

「……敗者に文句言う権利無し！」

二人はしばらく睨みあっていたが、最後には翔太が折れた。

「……わかったよ。ただし、一つだけだよ」

「え！？普通、三つ位でしょ」

翔太は無言で華を睨んだ。

しかし彼女はちょっと顔をそむけて空咳をした。誰から見ても笑いをごまかした咳だった。

華はニヤつきながら翔太に顔を向けた。

「じゃ、間をとって二つね」

「ちょっ……」

「一つ！」

翔太は黙らされてしまった。口をぱくぱくさせて華を見つめている。

華は続けた。

「まず、雪だるまの頭を作るの手伝って」

「……ま、いいや。で？二つ目は？」

「それは後でね」

華は片目をつぶって見せた。翔太は肩をすくめてから、雪玉を作り始めた。

最初に作った雪玉より一回り小さいだけの重たい球体をなんとか胴体に載せたあと、二人はしばらく口もきけないようだった。

両方とも雪だるまに寄り掛かってぐったりしている。

いつのまにか東の空のあちこちに黒い空が覗いている。

それに気付いた翔太は慌てて立ち上がった。

「ウワア！！華、やばいよ。夜になってる！」

「え？……ウワア……」

華と翔太の“ウワア”は全く違った。

華は再び空を見上げていた。

「……華？」

「見て、あそこ」

華は翔太の背中側の空を指していた。翔太は振り返り、息を呑んだ。

「ウワア……」

西の空に、薄暗い灰色の雲はなかった。ただ、光の粒に満ちていた。

「ねぇ、あれなに？」

華が指さしたところには冬空に吐いた息がそのまま固定されたような靄がかかっていた。

「天の川だ……」

「え？あれが？」

「多分……ホントに見るのは初めてだからよくわかんない……」

「とにかく、キレイ……」

彼女はぶるると震えた。夜の冷気が襲ってきたようだ。

翔太はそれを見て、そっと言った。

「帰ろっか」

華は素直に頷いた。

「うん。じゃ、二番目のお願いするね」

「え？」

「春に、また来てね」

華はクルリと向きを変え、走り出した。翔太はその後ろ姿に叫んだ。

「じゃ、春に来るよ！」

雪が降り始めた。

春はまだまだ先の方にある。しかし、絶対にやってくるのだ。

風が生まれ変わる時　分厚いベールが取れた時

冷たい雪が優しい雨となり　大地が蘇る　草木が目を覚ます

薄暗い日々は終わりを告げ　光が降り注ぐ

新芽が生まれ　花が咲き　優しい風と光に包まれる

風が生まれ変わる時

分厚いベールが取れる時

優しい光が降り注ぐ時

……すぐ近くに……

幼馴染

風が吹き抜けた。

たくさんの花びらが枝から手を離し、ヒラヒラと舞い始める。

その中の一枚は冷たく湿った地面ではなく、温かで柔らかい、少女の掌に行き着いた。彼女は桜の花びらを手でそっと包み込む。

少女の名前は桜田　舞。小学校の5年生だ。いや、春休みが終われば進級するので、正確に言えば6年生だ。

彼女はそっと溜め息をついて呟いた。

「麻地君、もう出かけちゃったかなぁ……」

「翔太がどうしたの？」

「うわぁ！！！」

舞も跳び上がらんばかりに驚いたのだが、声をかけた男の子の方は心臓が痛くなるという事態に陥ったらしく、胸を抑えてしゃがみ込んでしまった。

「だ、大丈夫？……て、隼人か」

「いきなり、そんなでかい声出してんじゃねぇ！！」

「じゃあいきなり後ろから声かけんな！」

男の子の名前は風間　隼人。舞とは――――幼稚園からずっと――――同級生だ。

「で？」

二人はずっと睨み合っていたが、隼人が均衡を破った。

「愛しの翔太がいないから一人でたそがれてた訳だ」

「な！」

舞は顔が赤くなっていた。怒りが四分、焦りが六分だった。

隼人はさらに追い討ちをかける。

「翔太が何しに行ったか知ってる？」

「知ってるわよ！」

舞は歯を食いしばって震えていた。今度は怒りと悲しみが半分半分だったようだ。

隼人を睨む目に涙がにじんでいる。隼人は自分が煽ったにも関わらず、かなり焦っていた。

「わ、わ！泣くなよ！」

「泣かないわよ！」

舞はぷいっと上を向いた。

隼人はどうしたら良いか分からず、ただオロオロしていた。

「女の子に会いに行ったんでしょ？」

「翔太だろ？……そうだよ」

彼女は溜め息をついた。隼人の目にいたわりの表情が浮かんだ。

「……好き、なんだろ？」

「え？誰が？」

惚けた彼女の反応を見て、隼人は鼻で笑った。

「フン！俺に翔太の事散々聞いといて……」

「あれ、そうだっけ？」

舞は落ちてくる桜の花びらを空中で掴もうと、必死で手を振り回しはじめた。

隼人は馬鹿にしてるように見ていたが、急にやる気になったらしく、一緒になってさわぎだした。

それこそ雪のように舞い落ちてきているにもかかわらず、二人の手に収まってくれる花びらは、ごくわずかだった。

自転車

「ねぇ、咲いてる花と散ってる花、どっちが好き？」

疲れて桜の幹に寄り掛かって座っていた舞が唐突に尋ねた。

隼人は花びらが落ちてくるのを待っているように手を前に差し出したまま、首だけを傾げた。

「桜は散り桜、かな」

「ふ～ん……じゃ、さ」

「ん？」

「もっといいスポットない？ここはちょっと…」

彼女の言う通り、二人のいる場所は花見には向かなかった。

桜が住宅地に一本ぽつんと立っているだけだ。隼人は少し唸ってから、パチンと指を鳴らした。

「いいところがある！……遠いけど」

「どの辺？」

隼人は力無く笑った。

「チャリで２０分ぐらいか……な？」

「えぇ？私、自転車パンクしてて……」

「う～ん……後ろ乗ってく？見る価値はあると思うけど……」

「隼人オススメだしね、後ろ乗せてって」

彼は黙って頷き、立ち上がって自転車を取りに歩き出した。

舞は気楽に歩いていたが、隼人は違った。

春物のやや厚い服を通してでも心臓が動いているのが“見え”た。

隼人は漕ぎ出す前に、後ろに乗っている舞に聞いた。

「速く行くか、安全に行くか！」

「……両方」

「無理！」

舞はア然として隼人を見つめた。隼人はニヤッと笑って親指を立てた。

「じゃ……Ｓで」

「Ｓ？“ｓａｆｅ”？それとも“ｓｐｅｅｄ”？」

「……さ、行くぞぉ！」

「コラ、答ろ！」

「……Ｓの反対はぁ……」

隼人が自転車を漕ぎ始めた。

舞は反射的にしがみついたが、意外とゆっくりと走っているので、ホッとして手を緩めた。

隼人が再びニヤリと笑ったことに気付かなかったのだ。

隼人は続けた。

「“M(マゾ)”！」

「えぇ！？」

二人を乗せた自転車は長い坂道を猛スピードで下っていった。

舞は隼人に必死でしがみついていた。

もちろん、耳をつんざく悲鳴をあげながら。

「あ～……楽しかった！耳がおかしくなっちゃったけど」

隼人は土手を走りながら笑っていたが、舞は半泣きだった。

「隼人の馬鹿ぁ！結局あの坂、下らなくてもよかったじゃん！！」

結局、坂を一度のぼってから目的地に向ったのだ。

「気にしない気にしない。ささやかな悪戯だよ」

「どこがささやか！？てか、あんたもかなり疲れてんじゃないの？」

「まあね……舞が重いからさ」

「殺！！」

舞は隼人の背中に必殺のパンチをくらわせた。

「げ！？あぶね！」

隼人はバランスを保とうと必死でハンドルを動かしたが、最後は派手に転んで、二人揃って土手から転げ落ちてしまった。

「イテテ……舞、大丈夫か？」

舞は腕をさすりながら答えた。

「大丈夫……一応」

隼人はホッとしたようだが、それと同時に怒りが込み上げて来た。

「馬鹿野郎！大怪我したらどうすんだ！」

「……ゴメン」

彼女は俯いていた。隼人は舞の右膝に傷が出来ているのに気付き、怒りがすっとひいた。

「……膝、怪我してるよ」

「自業自得ってやつかな……？」

舞は力無く笑い、立ち上がった。

しかし、堪えきれず“つっ！”と呻いて右足を上げた。

隼人はちらっと自転車に目をやり、溜め息をついた。

タイヤが曲がってしまっている———つまり、完璧に壊れたという事だ。

舞はそれを見て、目を閉じ、唇を噛み締めた。

「おい……舞！」

「え……？」

舞が目を開けると隼人が背中を向けてしゃがみ込んでいた。

「ほら、歩けないんだろ？」

「……重いよ？」

「分かってるから安心しな」

彼女は隼人の背中に飛び付いた。

「げっ！！」

「うるさい！」

隼人はクスクス笑いながら歩き出した。

「……？家は反対だよ？」

「桜、見るんだろ？」

舞は微笑んだが、何も言わなかった。

散り桜

晴天の下、隼人は歩き続けているが、時たまふらついてしまう。

その度に舞が心配そうに聞いた。

「降りようか？」

隼人は黙って首を横に振った。

が、最後には舞を土手の斜面に降ろした後、その横に倒れ込んでしまった。

彼の荒い息を聞きながら、舞が言った。

「血も乾いたし、私は大丈夫だから！無理しておぶらなくても……」

彼は手を挙げてそれを遮り、対岸を指差した。

「え……？……うわぁ！」

向かいの川岸にずらりと桜がならび、水面にちらほらと花びらが舞っている。

そして、浮かんでいる花びらがゆっくり流れ、川に桜色の帯が出来ていた。

「ホントは夜の方がいいんだけどな。結構きれいだろ？」

「うん、すごい……」

舞はじっとそれを見つめていた

舞はふっと息を吐き出し、隼人を振り返った。

「じゃ、帰ろっか」

返事がない。訝って覗き込むと、彼は寝息をたてていた。

「……そんな重かったのかな……？」

隼人は揺さぶっても起きない。

舞は———優しく起こすのを———あきらめ、彼の耳元で叫んだ。

「起きろぉぉぉぉ！！」

「フギャ！」

隼人は耳を押さえて跳び起きた。そして寝ぼけ眼で舞を睨んだ。

「テメェ……！」

舞は動じず、隼人に言った。

「ハイハイ、ごめんなさいネ。早く帰ろ」

「テメェ……謝る気ないな？」

「あったり前じゃん。“起こしてやった”んだから」

隼人はぶつくさいいながらも、背中を向けてしゃがみこんだ。

舞はその頭をポンポン叩く。

「ありがと。でも大丈夫だから」

「……ホントか？」

「うん」

舞はさっさと歩き出した。

彼は慌てて後についていった。

自転車が転がっているところに着いた。

「……」

「……」

「……これはもって帰れないな」

「ごめん……」

「あー……気にすんなよ。盗まれたってことにすっから」

「えぇ！？」

「そうすりゃ、このチャリが見つかっても言い訳必要ないし」

「まぁそうだけど……」

「さ、帰ろうぜ」

「……」

舞はこの嘘に乗り気じゃないようだ。自転車を見たまま動かない。

隼人はウンザリして、彼女の手首を掴んで歩き出した。

土手の下の道路をバスが通過した。

その中から二人を見ると、手をつないで散歩しているように見える。

バスに乗っている十数人の内、“目撃”したのは一人だけだった。

二人を目で追いながら、少年は呟いた。

「へぇ……隼人に桜田さん。良い感じじゃん」

そして向き直ってニヤッとした。

“華のことでからかったお礼をしなきゃな”

麻地　翔太は、華を思いだし、今までにないざわめきが自分の中で生まれたのを感じた。

合図の風が吹き抜けて　舞いが始まる

冬のスターは　白をまとって　舞い降りる雪

春のそれは　微かに着飾る

その名は桜

薔薇程は　飾れない　タンポポほどは　強くない

だから桜は　舞い続ける

雪より軽く　空を舞う

例え誰かが　見ていようとも

例え誰一人　太陽すらも見ていなくとも

薄く化粧し　風に乗り

ヒラリヒラリと　誇りを持って　そして可憐に

風とともに　雪より軽く　優雅に舞う

控えめな　しかし　華麗な踊り子

その名は桜

春の　大スター

炎天下

電車を降りた途端、夏の重い空気がのしかかってきた。

スタートの号砲が鳴った時のように、皆が一斉に同じ所に小走りで向かう。

ホームに降り立った人々の半分が階段を上り始める。

その頃ようやく電車から降りた少女がいた。彼女は辺りを物珍しそうに見回した後、そっと呟いた。

「これが東京かぁ……」

華は1番近い出口に目をやり、フッと溜め息をついた。

彼女は向きを変え、ホームのベンチに腰掛けた。

「すくまで待とっと」

2、3分後。ようやくほとんどの人が階段を昇りきった。

華は伸びをしながら階段に向かった。

しかし、急に走りだし、全速力でホームを後にする。

「なんでこんなに電車が来るの！？」

ホームのアナウンスが響いていた。

“間もなく2番線に電車が……”

華はメモに記された駅にたどり着いた。

先程の駅と違い、降りる人は少なく、階段が一つしかなかった。

彼女はそれを二段とばしで駆け上がる、そして、最後の三段を一気に跳び、両足で着地した。

その時、両手をすっと上げ、体操選手のようなポーズをとる。

「……何やってんの？」

声のした方を見ると、翔太がニヤニヤ笑っていた。

「……三段跳び」

「……ま、いいや。東京にようこそ！じゃ、行こうか」

翔太は駅の出口に向かいながら華に聞いた。

「で……ご感想は？」

「う～ん……人が多い」

後ろにいた二人が笑った。

華が振り返ると二人と目があった。

男の子の方は笑顔を見せたが、女の子はぷいっとそっぽを向いてしまった。

華は面食らい、どうしていいか分からず、助けを求めて翔太を見た。

翔太は後ろを見てなかったので、華が二人の名前を聞いているのと勘違いしたようだ。

「あ、コイツは風間　隼人。そんでこっちが桜田　舞さん。んでね・・・・・・」

翔太は華の耳元でなにかを囁こうとしたが、舞が止めた。

「違うってば！麻地君、いい加減にしてよ！」

「悪い悪い。でもそう見えて……」

「冗談きついわ！」

「ふ～ん……なるほどね」

華の呟きが聞こえたのは隼人だけだった。
彼は華にウィンクして、耳元で囁いた。
「面白い事になってるでしょ」
「……そうは言っても、風間君だって……」
「“隼人”でいいよ」
「……大きく関係してるでしょ」
「華もね」
そう言い残し、隼人は前の二人の間に割り込んでいった。
華は騒いでいる前の三人を眺めながら、暑い暑い、夏の東京に足を踏み入れた。

蝉は木に同化して自分の存在を隠している。その癖、その小さい身には不似合いな大きな声を上げている。
“ジー・・・・ジー・・・・ジー”
仲間と声を合わせて叫び続けている。

その声が反響し、４人の鼓膜を震わせている。“夏”の風物詩でもあり、ほかの季節では懐かしくなる声ではあるのだが・・・・

夏の只中では頭をふらつかせる効果があるようだ。

「アチイ……」

１０分も歩くと、皆へばって口もきけなくなってしまった。

皮膚の焼ける音が聞こえてきそうな太陽の光と、その光を浴び続けた灼熱のコンクリートのせいだ。

「翔太ぁ」

華が呻いた。

「どっかで休もうよ！」

隼人も同調する。

「そうだよぉ。しんじまう！」

「もうすぐ着くから！」

「ところで……」

舞が手で汗だくの顔を扇ぎながら聞いた。

「どこに向かってるの??」
翔太が答える前に隼人が唸った。
「少なくとも、ちゃんと冷房の効いてるとこであってほしいね」
「バカ、あんたには聞いてないわよ」
「何ぃ?」
華が遮った。
「で、どこ行くの?」
「家」
「え?麻地君の?」
舞は唖然としていた。隼人はニヤニヤして華を見た。
華は微笑みを———大人が子供を見る時の微笑みを———返しただけだった。
「うん。他に知り合い居ないらしいし」
「と、泊まるの!?」
舞の声は掠れていた。隼人はそれがまたおかしかったらしく、声を立てずに大笑いしていた。

華はちょんと舞の肩に触れた。舞はさっと振り返った。
華はその目つきにたじろぎそうになったが、何とか堪えてニッコリ笑った。
「桜田さんの家に泊まらせてもらえない？」
「……え？」
「だめかな？」
「……待ってて。親にきいてみる」
彼女はぱっと携帯電話を取り出し、当然の如くボタンを押し始めた。
華はちょっと驚いたようだったが、何も言わなかった。
舞はしばらく話してから残念そうに首を振った。
「ダメ。今日は別の客が来るから……ごめんね」
「こっちこそ、いきなりこんな事言って……」
隼人は舞がうなだれている――――はたから見たらわからないが――――のを見ていた。

何かを閃きかけたが、炎天下で脳が悲鳴をあげているらしく、最後まで考える事は出来なかった。

風の家

皆、翔太の家に着いた時に歓声をあげた。

「エアコン！冷たいもん！天国が待っている！」

隼人の叫びを聞き、翔太はニヤリとした。

「どうかな？」

「え？」

2階建ての庭付き一軒家なのだが、何か違和感があった。舞が最初に気付いた。

「……窓が全開だね」

「……思い出した……」

「何を？」

「翔太ん家……滅多に冷房入れないんだった……」

「「え！？」」

「その通り！意外と涼しいから安心しな」

翔太の言葉を全面的に信じられる者は一人もいなかった。

庭に足を踏み入れた彼らは心なしか気温が下がったように思った。

「……？なんか涼しい？」

「まぁ、芝生のがコンクリより熱ためないだろ」

「なるほど」

翔太がドアを開けると、風が吹き抜けた。暑さを薙ぎ払うかの突風に包まれた3人はホッとした表情になった。

「この家は」

風の抵抗が強く、苦労してドアを閉めてから翔太が言った。

「何故だかいい風が入って来るんだ」

「確かにこれならエアコンいらないな」

「お邪魔しまーす」

「今、親いないから気楽にしてて。あ、部屋は2階の奥。麦茶持ってくから先入っていいよ」

華の目が悪戯っぽく輝いた。

「翔太、冷蔵庫はあるのよね？」

翔太は無視して台所に向かった。
隼人と華は笑いながら階段をのぼっていった。
舞は二人を馬鹿にしているかのように鼻を鳴らす。その音を聞き、隼人が振り返った。
「舞、大丈夫か？」
「……は？」
「いや、デカイ音がしたから」
「なんでもないわよ！……やっぱり麻地君、手伝ってくる！」
舞はぱっと走っていってしまった。
「あ、ちょっと！」
追いかけようとする華を隼人が止めた。
「大丈夫だって」
「いや、別にどうって事ないけど……」
渋る彼女を翔太の部屋に押し込んだ後、隼人は片目をつぶって見せた。
「心配しなくても、翔太は華一直線だよ」

華は赤くなったが、瞬時にやり返した。
「風間君も桜田さん一直線でしょ？」
「さぁね。実は華一直線だったりして」
「ありえないわよ」
「翔太はありえるんだな」
華は照れ笑いを浮かべた。隼人は呆れたように首をを振り、肩をすくめた。

「ねぇ」
氷を入れたコップに麦茶を注ぎながら舞が切り出した。
いろんな菓子を皿にあけていた翔太はそれを中断し、彼女に顔を向けた。
「白井さんってどんな子？」
「……白井さん……？」

「華ちゃん！」

「あ、あぁ、白井ね。なるほどなるほど……どんなって？？」

「……別に」

「？？」

舞は派手な音をたてながら盆にコップを並べ、さっさと持って行ってしまった。

翔太は訳が分からず、台所に取り残された。

翔太が舞より少し遅れて部屋に入ると、隼人が既にコップの中身を空にしていた。

「翔太ぁ、コーラとかない？」

「コンビニ行けば山のようにあるよ」

「……くたばれ」

「ヒャッヒャッヒャ」

翔太はがぶがぶと麦茶を飲み干し、グイッと口を拭った。

「翔太」

「コンビニなら行かないからな」

「違げぇよ馬鹿」

隼人が怒ったように彼を睨んだ。

「今日泊まらして」

「あん？そりゃまたどうして？」

「馬鹿みたいに騒ぐにゃ泊まりがけの方がいいじゃん！舞もな」

「え？私も？？」

「……まぁ、親が帰って来てからだな」

翔太は菓子に手を伸ばした。３人もそれにならい、もくもくと食べ続けた。

寝惚け

“プルルルル……プルルルル”

電話のコール音が沈黙の中で響いた。

うとうとしていた翔太は、慌てて立ち上がり、部屋から出ていく。

同じくうとうとしていた華がぼんやりと待っていると、彼はぶつぶつ言いながら戻って来た。

「どうし……ファァァァ……たの？」

「……眠そうだな」

華は目をこすりながら頷いた。

「うん、眠い……で…？」

「今日は帰って来れないって」

「……誰が？」

「親。勝手に騒いでいいってさ。無責任な……」

「でも、よかったじゃん、はや……」

華は隼人と舞を振り返り、はっとして口をつぐんだ。翔太も二人を見て、ニヤッと笑って囁いた。

「邪魔しちゃ悪いから、下に降りよ。先行ってて」

華はニコニコして頷き、翔太の脇を通り過ぎていった。

翔太は机の引き出しからデジカメを取り出し、二人の姿を撮った。

カメラの中に、互いに寄り掛かって熟睡する若いカップルの写真が収まった。

「お似合いですぜ、お二人さん」

翔太はデジカメを慎重にしまい、部屋を後にした。

“二人が本当にくっつくまでは封印だな……ま、もうすぐだろうけど……”

階段を降りていくと、華がリビングに座り、新聞を広げていた。

「おもしろい記事あった？」

「ん？……これ」

華は何かを指差していた。翔太は後ろに回り込み、その記事を読んだ。

「なんだぁ？地域欄なんか見てんの？？」

「その他は家でも読めんじゃん」

「確かに……えっと……へぇ、花火大会の広告……いっぱいあるな」

「近いのある？？」

「一番近いのは……ここから会場まで2、３０分だよ」

「よし」

華のガッツポーズを翔太は唖然として見ていた。

「行くの？」

「だって家ん中で騒いだってたかが知れてるじゃない！……やなの？」

「いや、すごい人ごみになると思うから……」

「え゛」

「駅の人ごみなんて花火大会の半分にもならないな」

「え゛」

「と、いうわけで」

華はがっくり肩を落とした。翔太は続けた。

「家の屋根から見ようか」

華は微妙な顔をした。

「……屋根？」

「ちゃんと見えるよ？」

「そうじゃなくて、どうやって……？」

「ああ、窓から木の枝に移って、ちょっとのぼって屋根に飛びうつんの」

「危なくない？」

「親にゃ止められたけど……華なら大丈夫」

翔太の言葉を聞いて華は笑った。

「馬鹿ね、私の心配じゃないわよ！……桜田さん」

「あいつは仲間ハズレにならないためだったらグランドキャニオンにも飛び込むよ」

「隼人！」

二人は後ろに隼人がいるのに気付き、ぱっと離れた（一緒に新聞を覗き込んでいたので、いつのまにか顔と顔が数ｃｍの距離にあった）。あくびをしながら隼人が言った。どうやら、“半分寝てる”状態らしかった。

「キスでもしてた？」

「ば、馬鹿野郎！」

彼は階段に座り、壁に寄り掛かった。

「……違うの？翔太、好きならそんなビッグ……チャンスに……何

やって……たんだ……？」

「このあほ！華に失礼だろ」

「大丈夫……華は……お前が…好き……だから……」

「な！」

隼人はさらに何やら訳のわからないことを言いながら眠ってしまった。

後には互いに目を合わせられない二人が残された。

西の空

「……寝ちゃったな、隼人」

「うん」

まだ、互いに目を合わせられないようだ。

翔太はこんな事態を引き起こした“大馬鹿野郎”をじっと睨んでいた。

「それにしても……隼人、寝ぼけすぎ……」

「酔っ払ったみたいにね」

「麦茶で酔う奴がいるか！」

その時、隼人はムクッと身を起こし、すたすたと階段をのぼっていった。

二人は呆気に取られて顔を見合わせた。そして揃って噴き出した。

「なんだ、あいつ！」

「ホントに何か飲んでんのかも！」

一通り笑った後、足音をたてないように翔太の部屋を覗いてみると、ベッドに舞と隼人が俯せに並んで寝ていた。

しかも隼人の腕が、ちゃっかり舞の背中に置かれている。

「……疲れてるみたいだね」

「そうだね……」

翔太は先程と同じように写真を撮り、カメラをしまった。

「ちょっとはやいけど……屋根に上がろうか」

「賛成！……夕日は見える？」

「今がいい時間！……ついてきて」

彼は自分の部屋の窓の一つから身を乗り出した。華が慌てて彼の服を掴んだ。

「危ないわよ！！」

「落ちないって！だいたい落ちても怪我しないから」

「そうかもしれないけど……」

翔太は笑って華の手を振りほどき、すぐそばの木の枝にぶら下がった。

「よっと」

彼は慣れた感じで枝をよじ登った。そして、華を覗き込む。

「大丈夫？」

華はフフンと不敵に笑うと、窓から木に飛び移り、猿のようにのぼってしまった。

「田舎育ちをなめないで」

彼女はそういって、固まっている翔太にウィンクした。彼は吹き出した。

「そいつぁ失礼しました！」

「ところで……」

「何？」

「真夏の日差しを一日中浴びてたのよね、この屋根」

「相当熱いよ。少なくとも日なただったとこは」

「……屋根に日陰なんかあるの？」

「北側に少し」

彼は屋根にちょんと触った。

「……？何してんの？」

「ここはちょっと熱いから気をつけて」

翔太はほとんど手を使わずに屋根に飛び乗った。華も負けじと同じように跳ぶ。

「熱っ！」

屋根の上は蜃気楼が見える程の暑さだ。西日に曝され、華はふらつきそうになる。

必死で耐えていると、翔太が反対側の屋根から呼んだ。

「華、こっちこっち」

呼ばれた方に向かっている途中に、華は何かおかしいと感じた。

“……？妙に歩きやすい……”

目立たないようになっているが、掴みやすい出っ張りがいくつもあ

る。

華はそれに足をかけて楽々と翔太のそばに移動した。そこは日陰ではあったが、地面はじんわり温かかった。

「変な屋根ね。まるで子を遊ばすために設計されたみたい……」

「分かってるじゃん。親父はこういうの好きで、内緒で作ったんだってさ」

「フーン……ね、屋根裏は??」

「あるよ。入んない方がいいけど……」

「え? なんで?」

「……天然のサウナになってるよ」

「……うわ、想像しちゃったじゃん!」

翔太は笑った。

「ちょっと来て」

しばらくしてから、翔太はヒョイっと屋根のてっぺんに上った。

彼に続いた華は、右側の景色に目を取られてしまった。

「……すごい」

そこでは、雲の向こうで太陽が燃えていた。

そしてその光が、一面に広がる屋根を染めている。太陽は隠れかけているが、強烈な光は健在だ。

にも関わらず、彼女は目を離せなかった。

いきなり頭に冷たい水をかけられ、華は叫びながら振り返った。

「キャア！翔太！！」

翔太は水の出ているホースを握って笑っていた。

「アハハ！涼しくなった？」

華はぷいっと横を向いて、組んだ腕の中に頭を埋めた。

「オ、オイ、泣くなよ」

翔太駆け寄って背中をぽんぽん叩いた。

次の瞬間。華がガバッと身を起こし、翔太がまだ握っていたホースをねじり、彼に水をぶっかけた。

「うわ！！」

彼は思わず手を離して飛びのいた。

華はホースの先をつぶし、翔太を追う。しかし、すぐに水は止まってしまった。

「あら？止めちゃったの？」

「華、嘘泣きは良くないぞ」

華はニッコリした。

「涼しくなったでしょ」

「……」

その時、びしょ濡れの二人のいる屋根に風が吹き抜けた。

爽やかな風とは言い難い真夏の熱風だったが、二人が咄嗟に顔を庇う程強かった。

そう、熱い風を心地良く感じる程、強かった・・・・・・

二人は佇んだまま、風が吹いてきた方向を見ていた。

二人とも、今の風がもう一度吹くことを願っていたのだ。

第六感

“ヒュー……ド～ン”

この音が舞を起こした。

「ん……？花火……？って！寝てた！？」

と、隼人が横にいるのに気付く（隼人にとって命拾いだったのは、彼女の背中にあった手がすでに移動していたことだ）。

舞は見事な横蹴りで彼をベッドから落とした。

「グェ！！！なんだ！？」

「この……！！」

舞は隼人を罵る、いい言葉が見つからなかったようだ。

結局その後に何か言うことが出来ず、隼人の胸をどついて部屋から出ていった。

「イテッ！！……糞ぉ……舞、待て！！」

隼人が後を追い掛ける。

案の定、舞は人の気配のない翔太の家から飛び出した。

「待てって言ってんだろ！」

隼人がそういって彼女の腕を掴んだのは、家から５００ｍ程いったところだった。

「離してよ！花火大会に行くんだから！」

「バカ、あの人ごみで会える訳ないだろ。そもそも……」

「わかんないでしょ！！」

「イヤ、１００％会えないね」

「隼人、いい加減にしないと……」

「あの二人は会場にはいないと思うぜ」

「……え？」

舞はようやくもがくのをやめた。

「なんで寝てたあんたにそんな事が分かるの？」

「第六感」

「ハイ、当てにならない」

「まぁまぁ。俺の第六感は二人があっちの方にいるって言ってるよ」

隼人が後ろを指さすのを彼女は疑わしげな顔をして見ていた。

「ホォ……外れたら？」

「……え？」

「よし、何かおごってね」

「……えぅ？」

「サア、第六感とやらにしたがってみて」

「じゃあ、もし当たったら？」

舞はちょっと考えてから、冗談めかして言った。

「そなたの望みを聞いてあげましょう……」

隼人はボソッと呟いた。

「俺と付き合うとか？」

「え？何？？」

「……何でもね」

「ちょっと、なんか言ったでしょ？？言ってみなよ！」

隼人はちょっと首をかしげて、ちらりと舞を窺った。

「……豊島園でも行こっか？俺が金払うし」

「……でも、それだと隼人のほうが損しない？」

「金のことだけ考えればね」

「え？」

隼人は舞の戸惑った顔を見て、溜息をついた。

“舞って……鈍いな……”

舞の頭の上をクエスチョンマークが乱舞していたが、それでも隼人がどこに向かっているかわかった。

「隼人！麻地君ん家に向かってない？」

「さぁ」

日がすっかり落ちているのに、真夏の重たい空気はまだ消えそうになかった。

その空気を震わせる、花火の音も……

青い空　輝く太陽　聳える雲

暑く熱い季節

昼は叫び続ける　夏の使いの蝉たちが　夜は寡黙な妖精　蛍が支配する季節

夕立に洗われ　稲妻を眺め　雷に驚く季節

光を避けて陰求め　風を呼ぶ

夜空を見上げ　花を見んとす

大輪の花の下　太鼓が響き　人が浴衣姿で　はしゃぐ季節

花が散れば　夜空に流れる　銀の河の　星達織り成す　物語に　耳を傾け　夜を明かす

季節外れの三ツ星が　東の空を彩ると

再び　暑く熱い一日が　始まる

青い空　輝く太陽　聳える雲

……暑く　熱い　季節

天高く

少年は教室の窓から、空を見上げている。授業中であるから当然ではあるが、ひどくつまらなそうな顔をしていた。

「……翔太、何を見てるんだ？」

彼は頬杖をついたまま、目だけを動かして隼人を見た。隼人は前の席から体ごと翔太を振り返っていた。翔太はため息をついて答えた。

「……空」

「暗いねぇ。お前さ……イテ！！！」

いつの間にか後ろにいた担任教師が、教科書で隼人の頭を叩いたのだ。隼人が必要以上にギャーギャー騒ぎ、教室が笑いで満ちた。しかし、翔太は全く興味を示さなかった。彼はまたしてもため息をつくと、窓のほうを向いた。

澄みきった空は、驚くほど高かった。

学校が終わり、翔太はやれやれと立ち上がった。そしてランドセルを背負うと、さっさと帰ろうと歩きかけた。

「あ、待てよ！」

隼人が即座に追いつき、ランドセルをグイッと引っ張った。

「何すんだよ！？」

「今日、サッカーするからお前も来い」

隼人は有無を言わさないように、脅すかのような口調で言ったが、翔太はしれっと断った。

「パス。俺サッカー嫌い」

「じゃあ野球でも、ドッジでも言い。とにかく来いよ！」

「……気分が乗らねぇ」

隼人は左腕を彼の首に巻きつけると、右のこぶしを頭にねじ込んだ。

「来！い！っつってんだよ！」

「イテテ！分かった分かった！」

翔太は解放されると、頭をこすりながら毒づいた。しかし、隼人はそれにかまわず、他の男子に「バイバイ」と言ってから、自分の荷物を取った。

「さ、帰ろうぜ」

「……」

と、舞が二人に気付いた。

「あ、麻地君、私も一緒に帰って良い？」
翔太が何か言う前に、舞は荷物を持って彼の横に走ってきた。
「ありがと」
隼人は顔をしかめた。
「おい、ばか舞！翔太は何も言ってないぞ！」
「うっさい！あんただって勝手についていこうとしてるだけじゃん！」
「はぁ？何で俺が一緒に帰るのに許可がいるんだよ？」
「あんたが馬鹿でうるさいだけの能天気だからだよ！」
「その言葉そっくりそのまま返してやんよ！」
舞はフン！と鼻を鳴らした。
「ただ言葉知らないだけでしょ。あ～あ、これだから幼稚園児は」
「な、なにぃ！？」
「ガキ！って言ってんの。分かんなかった？」
「……！」

隼人は言葉を失い、目を白黒させていた。舞は勝ち誇った顔でそれを見ていた。

「おい、お二人さん。夫婦喧嘩もいいけど……」

クラスメートの男子がからかう様に割って入ると、舞はものすごい剣幕で怒鳴った。

「夫婦じゃない！！！」

彼女の大声を予測していた彼は、あらかじめ指を耳に突っ込んでいた。それでも声は十二分に聞こえた。彼はその指を耳から引き抜くと、ふっと息を吹きかけ、ドアのほうを指差した。

「……翔太、行っちゃったよ？」

二人は同時に———いや、若干舞が速かった。彼女はぱっと駆け出し、それと同時に手提げ袋を隼人の腹に直撃させた。これが見事にクリーンヒットして、隼人は腹を抑えてうずくまってしまった。

「は、隼人！？」

「クソォ……あの野郎……！」

「大変だな、あんなのが彼女だと」

「うっせぇ！！！」

隼人は腹を抑えてよろよろと走り出した。当然、自分の受け答えが

どういう意味に取れるかなど、考えていなかった。

秋の声

一方舞は翔太に追いついた。

「麻地君！」

翔太は小さく舌打ちした。

「……さすがに気付くか……」

「……ねぇ、麻地君、最近おかしくない？」

「なにが？」

翔太はさも面倒くさそうに答えた。舞はむっとしたが変わらない調子で言った。

「……どことなく、全体が」

「あっそ」

「……」

立ち止まった舞は、困ったような顔をして唇を噛んだ。翔太はかまわず進んでいく。

彼女は、翔太がおかしいのは何故なのか、よく分かっていた。

だからこそ、口には出したくなかった。

だからこそ、悔しかった。

舞は翔太の後姿を見ながら、小さな声で言った。

「……やだなぁ……」

「え？」

翔太は舞を振り返った。彼女があまりにも悲しそうな声を出したからだ。

そして彼女を見て、それが声だけでないことにも気付いた。

視線を少し落として、唇を噛んでいる舞は、翔太がびっくりするほど憂いに満ちていた。

「……桜田さん……？」

舞は答えず、横を向いた。その仕草が、余計に切なかった。

ただ、翔太はまだ、そんな言葉は知らない。

その時は、ずきんと胸の痛みを感じただけだ。

言葉を知らない分、言葉で片付けることが出来ない彼には、その痛みは重すぎた。

彼は舞を見つめたまま、動けなくなってしまった。

どういうことかも分からないまま、心臓の痛みはそこにあった。

「舞！！」

翔太ははっと目を上げた。隼人がずっと向こうから、猛烈な勢いで走ってきていた。

「このバカ舞！！普通、あそこまで……って、あれ？」

隼人は舞の様子に気付いた。そして、ひょいっとその顔を覗き込んだ。舞はさっとそっぽを向く。

「……泣いてる？」

「違う！」

残念ながら、明らかにそれと分かる涙声だった。隼人はニヤニヤ笑って翔太をみた。

「翔太、泣かしたな〜？？」

「……え、俺？」

翔太は呆然としていたようだった。衝撃を受けていたといってもいいかもしれない。

「……違うってば！」

「照れんなって。何されたのぉ？」

隼人がさらに続けると、舞は鼻をすすり、かなりきつく彼を睨んだ。

翔太が「やばい！」と思ったときには、もう既に舞の怒りは臨界点に達していた。

舞は怒鳴った。

「何であんたはいつまで経っても成長しないの！？」

「え、俺！？」

隼人は思わぬとばっちりにたじろいだ。

「いつも茶化したり、ふざけてばっかで……いい加減にしてよ！！！」

舞はぷいっと顔を背けると、足音荒く行ってしまった。男二人は目を丸くして舞の背中を見送った。

その後、隼人は珍しく難しい顔をして頭を掻いた。

「……うーん……俺が悪いのかねぇ？」

翔太はゆっくり頷いた。

「……多分」

「……でもさ、どう反応すればよかったんだよ？」

翔太はクスリと笑った。

「“よくも舞を泣かしたな！”って俺に殴りかかるとか」

隼人は目を細くして彼を睨むと、両拳を構えた。

「今やってやろうか？」

翔太はあわてて両手を出した。

「タンマ！タンマ！」

結局、彼らは冗談にしてしまった。

少女が望む物語など、少年にとっては笑い話以外の何物でもない。

ところで、逆もまた然りである。

男が、写真コンテストが掲載されている雑誌を、一枚一枚めくっていく。

一枚めくるごとに期待は失望に変わり、また次のページへの期待に変わっていった。

しかし、結局、彼の望むものは見つけられなかった。

「……ダメか……」

「また落ちたの？」

彼の娘が後ろから覗き込んでいた。いつもより、言葉が突き刺さるように感じた。

「……華、もうちょっといたわる様には聞けんのか？」

「無理。何で洗濯物取り込むのも手伝ってくれない人を、わざわざ気遣わなくちゃいけないのよ？」

明らかに、彼、白井努のせいではない「イライラ」が棘を作っていた。しかし努は、いそいそと雑誌を片付けると、華が取り込んだ洗濯物をたたみ始めた。

「……なんか、あったのか？」

「別に」

「……」

華は全く取り付く島もなかった。しばらく、親子は黙々と洗濯物をたたんでいた。

「……そういえば、さっき、４丁目のおじいちゃんのところの金木犀が咲いてたぞ。今度、見に行こう。な！」

「……なんでわざわざ。そこ、通学路の途中だからとっくに知ってるんだけど」

「じゃあ分かった！次の休み、コスモス畑に行こう！咲き始めてるらしいぞ」

「行ってくれれば？」

努は顔をしかめた。

「……あのな。俺のことを“クソジジイ”と呼び始める時期は否が応でも来るんだから、それまで少しぐらい付き合えよ。華、行きたいとこ言ってみ？」

「……」

華が何かつぶやいたが、努には聞こえなかった。

「え？？」

華は首を横に振った。

「……なんでもない。ねぇ、お父さん。お母さんからなんか言ってこないの？」

その言葉から幾分棘がなくなったので、努はほっと息をついた。

「なんかって？」

「「私が使ってあげるからこっちに来い」みたいなこと」

努は急に不機嫌になる。そして、むっとした様子で床に寝転がった。

「あらら、不貞寝？」

「……言ってきてるよ。しつこい位毎日毎日……」

「なんで？いいじゃん！夫婦でカメラマンと、アシスタント。何がいけないの？」

「決まってんだろ」

努は投げやりに言った。華は彼の背中を睨む。

「まさか、男のプライドだとか馬鹿なことは言わないよねぇ？」

努は答えなかった。華は、やれやれと、肩をすくめた。

努の妻、白井紅葉はプロのカメラマンだった。まったく芽の出ない

努と違って、紅葉は報道カメラマンとして、成功を収めていた。
華と努がこの街に越してきたのは、このちょうど一年前だ。
それは、努にとって四回目の“再出発”だった。
その決心は、紅葉が新聞社を辞めてフリーになると聞いたときに訪れたものだ。
負けていられるかと、華を連れてこの街に来た。
「あ〜あ……結局、ダメなのか……」
華はさびしそうな顔でその後姿を見ていた。
「……そーいえば、お母さん、この前の写真集は、お父さんが構成を考えてくれたから、あんなに売れたんだって言ってたよ？」
努はまた雑誌を取り、ぱらぱらめくっていた。
「んー……？」
「無理に同じ夢を追いかけることないんじゃないかな？」
努は、そのせりふが紅葉が言ったものなのか、それとも華の考えなのか分からなかった。
どちらにしても、ショックであることに変わりはないのだが。
「……やっぱ才能ねぇのかな？」

「知らないよ」

華は立ち上がると、洋服を片付けに行った。努は思わず、ため息をついてしまった。

虫の音

「行きたいとこ、かぁ……」

華はタンスをパタンと閉めた。

そして、椅子の上で足を抱えて座り、ひざに頬を乗っけた。

「……言えるわけないじゃん」

「華」

華はばたっと足を下ろした。しかし、努はしっかりそれを見ていた。ただ、その様子が何かかわいそうで、視線をそらした。

「……もしかして、行きたいのって、紅葉のとこか？」

華はキョトンとしたが、娘を見ていなかった努は、そのまま続けた。

「そりゃ、行かしてやりたいが……あいつは今、イラクだぜ？とても女の子を一人で送るわけには……」

「お父さん」

「……正直、二人分の旅費なんて……」

「いいよ。大丈夫」

華はにこっと笑って、机の上に置いてあった手紙を見せた。

「変な心配しないでよ。ほら、ちゃんと手紙ももらってるし、そこまで甘えたじゃないよ」

「……ごめんな……」

努はひどくつらそうに部屋を出て行った。

「やれやれ」

華は一人でつぶやいた。

「……全く、気が利いてるんだか利いてないんだか」

でも、前回「華が今行きたい場所」に行った時は、紅葉のところに行くという名目で出かけたのを思い出し、しょうがないか、と思った。

「そういえば、お父さん、知らないのか」

そして、紅葉のきれいな筆記体で住所が書かれている封筒を上にかざしてみた。その中の手紙には、「突撃あるのみ！」などという、まこと彼女らしい言葉が書かれていた。

「……お母さんは絶対歓迎してくれるんだろうけどなぁ……」

彼女には分からなかった。当然ではある。自分はともかく、相手がどう思っているかなど、確かめようがない。

「……変なの」

華はそう呟くと、クスクス笑った。なんだか悲劇のヒロインみたいで、おかしかったのだ。ふと目を上げると、窓の外に夜が迫っていた。その唐突さに華は驚いた。

「……？」

その時、なんだか、不思議な音がした。かすかに、しかしよく響いてくる。

「お父さん！」

華は父親を呼んだ。

「んー？？」

「ちょっと出てくる！」

「はぁ？」

「すぐ帰ってくるから！！」

華は上着をひっかけ、ぱっと飛び出した。

彼女の家の周りは、田んぼしかない。街灯すら、かなり向こうにポツンとあるだけだ。

華は家から漏れた明かりがギリギリ届く辺りで立ち止まった。

走っているときは聞こえなかったが、止まった瞬間、澄み渡った音

が聞こえてきた。

虫たちの声が、この場所の静寂を静かなまま包み込み、別の物にしていく。

“……リー……リー……リー……”

虫たちのかすかな歌が、無性にさびしかった。そして華は自分の顔に手を当てて、驚いた。

「……あれ……？」

一筋の涙が頬を伝っていた。そして、さらにもう一筋。華には、自分が何故泣いているのかわからなかった。

彼女が慌てて手の甲で涙をぬぐうと、自然に口から言葉がこぼれた。

「……東京、行きたいなぁ……」

実のところ、華はもっと具体的な場所を頭に浮かべていた。

それは「行きたい場所」というより、「会いたい人」だった。

「……翔太……」

その名前を口に出してしまった気恥ずかしさと同時に、やはりおかしさを感じた。

「……やっぱり変だ」

そして彼女は、少し微笑んだ。

と、その時。

華は何かに引っ張られるように、空を見上げた。

帰り道

翔太と隼人は、上着を肩に引っ掛けてすっかり暗くなった道を歩いていた。

二人とも、もう片方の手にグローブを持っている。

「いや～……まさか、真人があそこまで飛ばすとはねぇ」

「下手糞は手加減が出来んからな」

「負け惜しみか？」

「バータレ！」

隼人はリポーターの真似をして、マイクを差し出すようなそぶりをした。

「コメントお願いします！逆転サヨナラホーマーを浴びた麻地投手！」

「……その前の風間一塁手のエラーがなければ、スリーアウトだったんだがな」

翔太が非難がましく言うと、隼人は本気で顔をしかめた。

「そんな話は聞いてねぇよ！」

翔太は吹き出した。

「あ」

隼人が声を上げた。翔太が彼の視線の先を見ると、コンビニから舞が出てきた。

「舞！！」

「？……うわっ……」

「なんだよ、その反応」

「……だって……」

舞はバツが悪そうに言った。

「なんか恥ずかしいというか……」

しかし、男二人は揃って「何が？」という顔をしていた。舞は呆れたように笑った。

「アハ、ハ……なんでもない」

「「？」」

舞はため息をついた。しかし、すぐに気を取り直して、ニコッと笑った。

「楽しかった？麻地君」

「……まぁ、ね」

舞と隼人には、このときの翔太がひどく大人びて見えた。

「……翔太、悩んだってしょうがないぞ」

隼人が心配そうに言った。翔太は驚きをうまく隠して笑った。

「悩む？誰が？」

しかし、隼人は笑わなかった。

「お前も、舞も、先走りすぎなんだよ」

立ち止まった二人を置いて、隼人は進んでしまう。

「……隼人？」

彼も立ち止まったが、振り返ろうとはしなかった。

「先走ってるってどういうことよ？」

「そのまんまだよ」

隼人は真面目な顔で二人を振り返った。

「恋愛って字も書けないくせに、そんなことで悩むなんて、馬鹿らしいじゃん？」

「……私、書ける」

舞の駄々をこねているような口調に、隼人は笑った。

「そーいうことじゃなくてさ」

「……俺は……」

翔太は考えながら言った。

「……書けるかどうか怪しいけど……確実に「会いたい」っていう字は書ける……」

隼人が目を見開いた。それと同時に、舞がひどく悲しそうに視線を落とした。

しかし、翔太はそれを見ていない。

「……そう思ってるだけだよ。それでも、先走ってるのかな？」

隼人は何か言いかけたが、何も言わずに口を閉じた。それからしばらく、誰も何も言わなかった。

「……帰らなきゃ。親が心配する」

そういったのは舞だった。

「ああ」

「……そうだね……」

三人は並んで歩き始めた。

分かれ道に来て、翔太は手を振りながら言った。

「じゃあ、隼人。桜田さん、しっかり送れよ」

「はいはい。舞、行きますよ〜」

しかし、舞は動かなかった。

「麻地君、ちょっと待って」

翔太は「え？」と立ち止まった。

「麻地君は……」

「……何？」

舞は下にさまよわせていた視線を無理に上げて、翔太を直視した。

「……華ちゃんが好きなんでしょ……？」

翔太の動きが止まった。いや、三人とも、そこだけ時間が止まったように、動かなかった。

自転車が三人を追い越したとき、翔太ははっと我に返り、明るく言った。

「ハハッ、いきなり過ぎでしょ！」

「……そうだよね」

舞はうつむきながら、悲しそうに微笑んだ。しかし、すぐに無理して明るい笑顔を作ると、また顔を上げた。

「ごめんごめん。じゃ、また明日。行こ、隼人」

そして、なんでもないかのように歩き出す。

隼人はそれを追いかけつつ、親友を振り返った。

しかし、彼はまたしても、何も見ていなかった。

十五夜

しばらく、隼人も何も言わなかった。

舞の後ろを黙々とついていく間、ずっと考えていたのだ。

「……舞」

「……何？」

二人は同時に立ち止まった。

「……なんであんなこと聞いたんだよ？」

「……聞きたかったから」

舞は隼人の顔を見ようとはしなかった。それで、彼はため息をついた。

「……馬鹿だな、相変わらず」

舞はちょっとだけ微笑んだ。

「うるさいよ」

「……」

その時、舞は始めて隼人を振り返った。

「……隼人……？」

舞の目に、幼馴染が別の姿で映った。

隼人は、いつもとは違った。

ふざけているときの子供っぽい笑みも、ちょろちょろと落ち着きのない様子も、そこにはなかった。

いつもはうるさいだけの幼馴染が、静かに、ひっそりとたたずんでいる。

舞は自分の心臓の辺りを抑えた。

（……トクン……トクン……）

「……？？」

風が吹いた。

すっかり色づいた紅葉が、二人の間に舞い降りる。

その葉はひらひらと漂っていたが、最後には隼人の足元に着地した。

隼人は黙ったままそれを拾い上げ、くるくる回した。

「……隼人……？」

彼ははっと顔を上げる。そしていつものように笑った。

「悪い。帰ろっか」

「……うん……」

隼人は拾った紅葉を舞に差し出した。舞がそれを受け取ったとき、お互いの指が触れ合った。

舞のざわめきを、隼人は知らない。

二人は並んで歩き始めた。

翔太は立ち止まった。

また、心臓が痛くなっていた。

「……クソォ……いきなりあんなこと聞きやがって……」

翔太はふと、自分の右手を見つめた。

何処からどう見ても、子供の手だった。

何も持たない、ひ弱な手だ。

どうしようもなかった。

自分では何も出来ない。

「……なんで、住所も何も聞かなかったんだろう……？」

そして、拳を握り締めた。

ちょうどその時、彼の頭上の街灯が切れた。

点滅したり、すぐに回復したりはしなかった。ただ、切れた。

彼は反射的に、空を見上げた。

少年と少女は、同じ空を見上げていた。

ほんの少し離れた場所で、同じ時、同じ月を。

そして二人は、同じ想いを抱いている。

“会いたい”。

ただ、それだけだった。

月はそんな二人を、静かに見つめている。

色とりどりに着飾る木の葉

あでやかに熟した果実

微かな微かな虫の声

全て素晴らしいはずなのに

何故だろう　この想い　この空しさ　この淋しさ

どこまでも晴れ渡る青い空

微かに歌う星座達

静かに佇む月の光

全て美しいはずなのに

何だろう　この痛み　この切なさ　この苦しさ

ホントは知ってる　分かってる

この季節を通る度　少女と少年は　大人になっていく

全てが美しいのに

全ては悲しい

逢いたい人に　逢えないとき

この季節が　目に染みる

冬の匂

季節が一回りした。

一人の少女が、物語が始まった場所に立ち、空を見上げていた。

薄暗い灰色の空は、今にも泣き出しそうだったが、懸命にそれをこらえているように見えた。

「……そんなに我慢しなくていいのに」

華の優しい声は、白く空に浮かび、そして消えていった。

しかし、空はまだこらえている。

華の白い溜息もまた、空に溶けていった。

華はそこにいれば、何かが始まると信じていた。

いや、信じようとしていた。

電話番号も住所も知らない。携帯電話を持っていないから、メールも出来ない。

「そこ」への行き方は覚えているが、そう出来るほど、大人ではない。

そして、さらに言えば、この気持ちに目をつむれるほど、子供でもなかった。

「……去年の冬に一回」

華は指を折って数え始めた。

「春に一回。夏にこっちで一回、向こうで一回……」

そして、小指が立ったままの左手をじっと見つめた。

「……たった四回??」

数えなくても分かっているのだが、それでも信じがたかった。

今までが奇跡だったのだ。

華にもそれは分かっていた。

口で、「春に会おう」とか、「夏に会おう」とか言っただけで再会できるなんて、普通ではありえない。

急に寒気を感じた華は、その左手をポケットに突っ込んだ。

しかし、そこから動こうとはしない。

間もなく、華はその場に腰を下ろし、目を閉じた。

彼女が吸い込んだのは、確かに、冬の匂いだった。

黄昏時

少年は溜息をついた。

近くに隼人がいたら、「またか」と首を振るところだ。

というか、それ以外のクラスメートが見ていたら、やはり同じ反応を見せるだろう。

近頃の翔太の「黄昏癖」は、皆に知れ渡るほどいつものことだった。

そして、それほどまでになると、もちろん自覚もある。

「……畜生」

翔太はポケットに手を突っ込み、夕暮れ時の道を家に向かって歩きだした。

全く馬鹿馬鹿しい。考えたって、会えるわけじゃないのに。

彼はそう思った。

もしかしたら、もう一生会えないかもしれないのに。
そう思い、彼はまた溜息をついてしまった。
「……クソ」
無限ループだった。抜け出すことは出来ない。
「……麻地君？」
「……桜田さん」
舞だった。習い事の帰りらしかった。
「……ま～た黄昏てたの？」
舞はそう言って笑ったが、翔太は表情をさらに曇らせた。
「……自分でも、馬鹿みたいだとは思うんだけど……」
舞もまた、表情を曇らせる。彼女にも、思い当たる節があった。
「……期待、しちゃうんだよね……分かるよ？」
「え？」
翔太は目を丸くした。

「だって、桜田さん、隼人は……」
「やれやれ、「鈍い」というか、「無感覚」って感じだね」
舞は肩をすくめ、呆れたように笑った。
「？」
舞の表情は明るかった。
「聞いてよ！この前、隼人と買い物にいったんだけどさ……」
舞の話によると、隼人はとりあえず来はしたものの、荷物を持ったりだとか、一緒に並んで歩いたりといったことはまるでしようとしなかったらしい。
「しかもあの馬鹿、バッドとグローブまで持ってきてたんだよ！？」
翔太はクスクス笑っている。
「しかも、それだけじゃないの」
舞は怖い顔をした。
「駅で電車待ってる時、どこに持ってたのか、漫画出してきて……」
「……それで？」
「地べたにあぐらかいて、ゲラゲラ笑いながら読んでやがんの！！」

翔太はついに吹き出した。

「あいつらしい！！」

「笑い事じゃないよ！ホントに恥ずかしかったんだから！」

舞は大きな声を出したが、どやら、それほど怒っているわけでもなさそうだった。

「……は、は～ん？」

翔太はニヤニヤ笑って彼女を見ている。

「……な、何？そのしたり顔は……？」

「別にぃ？」

と、言いつつ、満面の笑みはそのままだ。舞は眉間にしわを寄せた。

「……麻地君？」

「いや、喜んでるだけだから気にしないで」

「喜ぶ？？何を？？」

「桜田さんと隼人がくっついたこと」と、翔太は言いたかった。

しかし、そんなこと言ったら、舞がどんな反応を示すかわからない。

だから彼は笑っているだけだった。
舞は口の中で呟いた。
「……待てよ……」
そして、顎に手を当てて、考えている。
「……麻地君」
「……は、はい……」
翔太はざざっと後ずさった。
「……まさかとは思うけど、私と隼人を勝手にカップルに仕立て上げて喜んでる、なんてことないよねぇ……？？」
舞が目を細くして翔太を睨むと、彼はさらに一歩下がった。
「えっと……あー……そうだ！！用事を思い出したぁ！！」
「嘘付け！」
「ホントだって！！じゃ、また明日！！」
翔太はぱっと駆け出した。その早いこと早いこと。あっという間に角を曲がっていってしまった。

「……やれやれ」

舞は呆れたような、ホッとしたような顔で笑った。

嫌悪感

翔太は三本目の角を曲がって、舞が追いかけてきていないことを確認すると、ぴたっと止まった。荒く息を吐き出しているその顔には、もう笑顔はない。

「……クソ」

翔太は自分の中に湧き上がっている感情に気付き、顔をしかめた。

うらやましかったのだ。

加えて、「壊れてしまえばいい」と一瞬本気で考えてしまった自分に、翔太は嫌悪感を覚えた。

（……なんでなんだろう）

翔太は思った。

（なんで、あいつらは一緒にいれて……）

翔太は頭を思いっきり振り、その考えを打ち消した。

それが「会いたい」と悩んでいることより、ずっと無駄に思えたのだ。

「翔太！」

隼人の声だった。翔太は内心舌打ちをした。タイミングが悪すぎる。

「よ、また黄昏てたのか？？」

隼人はニヤつきながら、翔太と並んで歩き始める。翔太は仏頂面で答えた。

「……さっき桜田さんにもそう聞かれた」

「へぇ、舞に？？」

隼人は翔太の不機嫌そうな様子など全く意に介さず、明るく笑った。

それで、翔太はあからさまに舌打ちをする。

「……いいな、お気楽な奴は」

「？なんか機嫌悪いな？人生、楽しんでなんぼだぜ？」

隼人はふと、翔太が横にいないことに気付いた。

彼が振り返ると、翔太はじっとりとした目をして立ち止まっていた。

「……なんだよ？」

「お前、気楽で良いな」

「はぁ？」

隼人は「失礼な！」と思った。

「……そりゃお前は楽しいだろうさ」

表面上はそれほどではなかったが、その中には、猛烈な毒がこめられていた。

それに気付いた隼人は、顔をしかめた。

「おい、どういう意味だ？」

翔太は答えなかった。

答えたくなかったのだ。

「……なんでもねぇよ」

そして、隼人を押しのけ、歩き始めた。

その悲痛な顔に、隼人は抗議を飲み込んだ。

そして、追いかけることも出来ず、ただ、その背中を見送った。

どんどん自分が嫌いになっていく。

翔太は一人で呟いた。

「……馬鹿みたいに悩んで、嫉妬して、八つ当たりして……」

そして、静かに、そして悲しげに付け加えた。

「……だっせ……」

でも、と翔太は思った。

もうすぐ会える。

本当の「冬」がきたら、あの場所で、華が待ってる。

「恋愛」という字が、今書けているのかどうかは、正直怪しい。

でも、翔太はそれを書こうとしている。

それを華に伝えたかった。

木枯らしが、ほんの少しだけ残っている、茶色の木の葉に襲い掛かろうとしている。

もうすぐだ。

その日、泣きそうになっていたのは、空だけではなかった。

華が「あの場所」に膝を抱えて座り、鉛色の空を見上げている。

華には、この空のせいで気持ちが沈んでいるのか、この気持ちのせいで空が曇っているのか分からなかった。

何の動きもないこの曇り空が恨めしかった。

しかし、自分の足元にある大きなボストンバッグは、もっと嫌だった。

それで華は、頑なに上を見続けている。

結局、努（華の父親だ）は、何にも分かっちゃいなかった。

「……そりゃ、言わなかった私が悪いんだけどさ」

でも、言えるはずもなかったのだ。

二日前、努は喜び勇んで華を迎え入れた。

「華！！やったぞ！！」

そして、右手に握り締めている紙切れを、頬を赤くしている（「あの場所」の寒さのせいだ）華の顔の前で振り回した。

「……？何それ？」

「紅葉からの手紙と、勝負師の証だ！！」

華の目は「勝負師の証」の正体を鋭く見極めた。

「……馬券？」

華は目を細くして努を睨んだ。

「……お父さん、何やってんの？」

「わ、馬鹿、一応仕事で行ったんだよ！！そんで、買ってみるかという話になって……」

「……もういい。それで？」

努は娘が自分を全く信用していないことにショックを覚えたが、ひとまずそれは置いておくことにした。

「……1万円分買って、7万入った」

しかし、華は全く嬉しそうではなかった。努に「紅葉」を思い出させる低い声で呟いた。

「……悪銭身につかず」

「……なんか言ったか？」

「別に。ってか、一万も使ったの！？」

「まぁまぁ、当てたんだから文句言うなって」

その瞬間、華の怒りが爆発しそうになった。それで努は慌てて紅葉からの手紙を広げる。

「わ、こ、これ見ろ！！」

「……お母さんが？」

「今、アメリカにいるんだと！！ワシントンだ！！」

華は眉間にしわを寄せ、手紙を受け取ると、さっと目を通した。

「……それで？」

「……それで、だ！」

努はにんまりと笑った。

「突然行って、あいつを驚かせようと思ってな！」

「……はーん……」

そりゃ驚くだろう。

その後に喜ぶのか怒るのかはわからないが。

「……で？いつ？」

「三日後の飛行機をもう取った！華は半年振りだな。紅葉に会うの」

「三日後！？」

華は愕然としている。

「で、でも、学校まだ……！！」

「何を今更。なんだかんだで結構休んでるだろ？二、三週間ぐらい気にすんなよ」

「それはそうなんだけど……」

「それにさ、早く紅葉に会いたいだろ？」

華の父は、子供みたいな顔で笑った。そんな風に言われては、喜ばないわけにいかない。

華は無理に笑顔を作った。

それで努が満足そうに頷いた時、華のみぞおちの辺りはきりきり痛んでいた。

そして、出発の日になってしまったのだ。

当たり前だが、翔太は来なかった。

いつも、こんな風に出発するのだ。

そして、戻ってくることはない。

「……分かんないなぁ……」

どうしたら良いのだろう。

ここで待ち続ける？

翔太が来てくれるかどうかも分からないのに？

華は首を振った。

駄目。

そんなことを言い出して、お父さんを困らせる訳にはいかない。

結局華は、子供みたいに駄々をこねることが出来なかったのだ。

それが全てだ。

それが出来れば、同じ景色の中に二人が再び立つという、「奇跡」は起きた。

しかし、華には出来なかった。

華を呼ぶ声がする。

彼女はため息をついてから立ち上がり、ボストンバッグを担いだ。

その吐息が空に白く浮かび、溶けていく。

その行方を見送った華は、ふと目をこらした。

何かが見えた。

空一面で、何かがゆっくり動いている。

白の精が舞い降りてきたのだ。

その年の最初の一つが、差し出された華の掌の上にふんわりと着地する。

華が見つめる中、それはすぐに溶けてしまった。

「……先に泣くなんてずるい」

そう呟いた華の掌に、新たな涙が舞い降りた。

彼女はそれを握り締めると、空を見上げた。

静かに静かに、雪が降り出していた。

雪化粧

華はそこにいなかった。

でも、翔太はなんとなく気付いていた。

華はここじゃないどこかで、ここに立っていないことを憂いている。

少なくとも、彼女はここにいたかった。

翔太にはそれが分かった。

昨日まで、華はここにいたかもしれない。

いや、少し前まで、本当にほんの少し前まで、ここで僕を待っていたはずだ。

でも、今はいない。

それだけのことだ。

翔太は、白く化粧を施された、「始まり」と同じ野原を見つめていた。

ずっと昔から、多分滞ることなく繰り返されてきた景色。

だから、待てる。

きっといつか、ここで、また会える。

巡る季節は無限に続く。

それを信じれば、「その日」がやって来る。

彼はそう信じ、ホッとため息をついた。

翔太の吐息は、奇しくも、華のそれと同じ形を描き、空に溶けていった。

そしてまた、雪が降り始める――――。

音を喰らうもの

静寂を吐き出すもの

空から贈られた　白の精

“しんしん”という“声”を出しながら

静かに全てを包みこむ

雨は叫びながら

躊躇うことなく地面に向かう

白の精は　躊躇いながらも素直に進む

風に声を掻き消されても

溶ける時が来ると

分かっていても

ただ白をまとって

地に降り立つ

しんしんしんしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしんしんしん
枯木に　家に　地に子供
皆に化粧し
春まで着飾らせる
天からの白き使い
しんしんしんしんしんしんしんしん
しんしんしんしんしんしんしんしん
音を喰らうもの

静寂を吐き出すもの

始まり

「運命」。

これほど頼りなく、これほど抗いがたいものがあるだろうか。

人生において、「運命とは、自分で切り開いていくものだ」という
まこと清々しい言葉は、恐らく正しい。

いや、むしろ、人はそう出来る。出来るはずだ。

しかし、恋愛においてはどうだろうか。

どれだけ惹かれても、どれだけ想っても、相手が振り向いてくれな
ければ、ただ、空しく過ぎていくだけだ――――。

春である。

暖かい木漏れ日が注ぐ中、土手の上を早足で歩いていく少年が一人。

「舞！」

隼人は少し先を歩いていた少女を呼び止めた。

あの、一続きの季節から幾分時が過ぎ、彼らの身長はすっと伸びていた。

声変わりも終わった彼らは、背伸びをすれば「大人」に届く場所にいる。

「あれ？隼人？」

振り向いた舞は小首をかしげた。

「確か、翔太君と出かけるって言ってなかった？」

隼人は追いつき、二人で並んで歩き始めながら、肩をすくめた。

「中止になった。なんか、翔太、おばあちゃんが倒れちゃったらしいぜ」

「え！？あの、何回か会った事ある……？」

「そうそう。大したことはないらしいんだけど、一応家族で見舞いに行くことになったんだって」

「大したことはない」と聞き、舞はホッと息をつくと、しばらく黙って歩き続けた。

しかし突然、はたと立ち止まった。

「……ちょっと待って。そのおばあちゃんの家の近くで……」

「ご名答」

隼人は二、三歩先で舞に振り返り、ニヤッと笑った。

「奇跡が起こるなら、あそこしかないよな」

舞は興奮気味に頷いた。と、彼女の目が何かを捕らえた。

「……あ……」

「え？」

隼人はその視線の先を見る。しかし、彼には何も特別なものは見えなかった。

「？どうしたの？」

「ううん。なんでもない。ねぇ、ちょっと疲れちゃった。そこで休んでいかない？」

「へ？」

なんでもない、ただの土手の斜面だ。

「……別に良いけど……」

「よし」

舞はにっこり笑った。

それで隼人は、この春の日差しより暖かく、桜の花びらより軽やかなものを感じる。

斜面に腰を下ろした彼は、少し焦りながら言った。

「そういえば、桜、散っちゃったな。今年はここに来れなかったけど……」

隼人は「あれ？」と思った。

「どうしたの？」

舞が覗き込んでくる。その顔が心なしか、赤くなっているように見えた。

「……なんでもない」

隼人は呟いた。

ここは二人の始まりの場所。

あの時、ただ並んで座っていた二人は、もういない。

二人が寄り添って座っている。

そして

翔太はそわそわと、祖母と両親との会話を聞き流していた。

窓の外で、彼の知らない鳥が、何かを目指すように一直線に空へ舞い上がっていく。

それを眺めていた翔太は、自分を呼んでいる声に全く気付かなかった。

「翔太！！」

何度目かで翔太ははっと顔を上げた。彼の父が、苦笑いを浮かべる。

「全く、心ここにあらず、だな」

「え、いや、そんなことは……」

翔太はばつが悪そうに頬をかく。

「お前が言い出したんだろ？見舞いに来ようって」

「……そーだけど……」

翔太は窓の外を見た。本人は気がついていないが、その横顔が、はっとするほど大人びていた。

しかし、どちらにせよ、その意味を知っている三人にとっては、それが微笑ましく思えた。

「……翔ちゃん、行って来ていいのよ？」

翔太の祖母はクスクス笑った。

「え……でも……」

「じつはそっちが目当てだったんでしょ？」

両親にばれていることは知っていたが、祖母にまでとは思わなかった翔太は、ガクッと体勢を崩した。

「ほら、行ってきなさい。もしかしたら、もしかするかもしれないよ？」

翔太はすまなそうに眉を下げた。

「おばあちゃん、ゴメン」

翔太の祖母は実に楽しそうに笑った。

その笑顔に後押しされるように、翔太は立ち上がり、家を飛び出した。

もう、全て過ぎたことだ。

華は思った。

アメリカに行く飛行機の中で泣きそうになったことも、嬉しそうに笑っているお父さんを見て涙を必死で隠したことも。

お母さんが最初に驚き、直後にお父さんに雷を落としたことも。

その理由を知った私が泣いてしまったことも。

――華があそこで「運命」を待ってたのに！！！――

「……でも、お母さん」

華は心の中で呟いた。

「……やっぱり、「待ってる」だけじゃ、ダメなんだよ」

たとえ意味がなくても、たとえ叶わない夢でも、手を伸ばさなければ、掴めるはずもない。

流されるままでは、どこかにたどり着けるわけがないのだ。

（……私は、自分で何かしようとはしなかった）

「会いたい」と思うだけだった。

ただ、願うだけだった。

華は溜息をつき、あの日のように、空を見上げた。

そろそろ、行かなくてはいけない。

いつまでも立ち止まっているわけにはいかないのだ。

「……自分で言ったんじゃない。「これが最後」って」

華は携帯電話で時間を確認した後、静かに目を閉じた。

あと、少し。

あと、少しだけ。

あと、ほんの少しだけ、奇跡を信じていよう。

少女は、「始まりの場所」で待っている。

少年が、「始まりの場所」に向かっている。

奇跡は、起きる。

〜Fin.〜

後書き

「Ｓｅａｓｏｎ」、完結です。

一体何回目でしょう。笑

今度こそ、完全に完結です。（マイケルジョーダンの引退宣言と同じになるかもしれませんが。笑）

さて、前回の完結時にも後書きに書いたと思いますが、この作品のテーマは「四季」と「リアルなファンタジー」。

そのうちの「四季」。

その美しさを全て描くことなど出来ませんが、本質を少しは掬えたのではないかと自負しております。

まぁ恐らく、自分がこういう「文学」的な小説を書くときには、必ず含まれるテーマだと思っていますので、この方面には終わりがないでしょう。

さて、もう一つのテーマ、「リアルなファンタジー」。

これを書く以上、目指すのは「誰かを幸せにする小説」です。

現実は重く、苦しいもの。

だから、フィクションの中でぐらい、夢を見ていてもいいじゃないか。

私はそう思っています。

ですから、これもまた、私の書く小説の中に必ず含まれるテーマといえます。

自分が目指していたものに辿りつけているのか、それは分かりませんが、以前よりは近づくことが出来たような気はします。

この次も、「誰かを幸せにする小説」を目指して書いていきたいと思っていますので、またこの名前を見つけたら、目を通してみてください。

ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました！

田中　遼

P．S．

章機能というものが出来た時にやろうとしてたことを、ようやく実行しました。

そのついでに多少読み直してみて「うわっ」と思った部分がちらほ

ら……（―・―；）

実のところ、ここでした「完結宣言」の後に、またまた「夏」編をすっかり書き直して、それ以降の話にもチョコチョコ修正を加えたりしてはいるのですが……。

まぁやる気が出たらまた掲載し直します。笑

ではでは。

２０１１年４月２０日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4929f/

Season

2011年5月12日09時14分発行